

「今日の説教・聴き手のために」 2012年7月15日明治学院教会(279)

(このプリントは毎週作っているものです。)

牧師 岩井健作

「足下から」

聖書 ヨハネの手紙 一 3章11節—24節

選句「子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう。」(18節)

- ① 「子たちよ」という呼びかけから考えると、熟年の教会指導者「老ヨハネ」が、「愛」について基本的なこと、ゆえに根源的なことを「親の愚痴」にも似て語っているように思えてなりません。なぜ根源的なことなのかは、24節「神がわたしたちのうちにとどまってくださる」とあるように、「愛し合う」という人間相互の関係は神関係と密接不可分な一体関係だからです。いやそんなことは分かっているという「賢い知識人(グノーシス思想的キリスト教理解の人)」、つまり「言葉や口先だけ」の人が存在するからヨハネはくどくならざるを得ないのです。そんな賢い人に「カインのように(弟殺しをやった)なつてはなりません。」(12)と聖書の故事を引いて、「兄弟」という身近な足下の存在に神が存まし給うことを説くのです。神はアベルの神でもあるのです。
- ② 愛の根拠を語るために16節は「イエスはわたしたちのために命を捨ててくださいました」とキリストの贖罪論を語ります(4:9, 10に再度登場)。これは多分後世の教会が節を明確にするために入れた挿入であろうと註解者は指摘しています(プルトマン)。ヨハネの論は、愛の程度や、また贖罪論への気付きにあるのではなく、神関係(縦・信仰)と人間相互の関係(横・倫理)の二つの関係がいつも自覚され、全体として、あるいは経験としてつかめていないことへの注意なのです。二つがバラバラに分離していることを「言葉や口先だけ」と批判しています。平たく言えば「神によって生かされていることの全体」を悟っていないのです。
- ③ それでも、新約学者のシュタウファーはこのヨハネを批判します。「兄弟愛」を説くヨハネはイエスへの理解が不徹底だと指摘します。イエスは「敵を愛し迫害するもののために祈れ」(マタイ5:43)と言われた。「ヨハネのキリストは敵のためにではなく、友のために死ぬ(3:16)。彼が弟子たちに告げる新しい戒めは敵への愛ではなくて、兄弟への愛である(3:13, 23)……この壁の中の愛……と敵しの心構えは共同体の外部との境界で急に消え失せる」(『イエスの使信』256ページ)。厳しい批判です。ヨハネだって、「兄弟愛」の射程に、兄弟への「同情」(3:17)を説きます。「世の富(ピオス)」は①生涯②生活、生計③生活必需品、物資、富(マルコ12:44、ルカ15:12、ヨハネ一2:16、3:17)を持っているものに対してです。かなり具体的な日常生活の分かち合いです。でも「同情(スプランクノン)、憐れみ」は名詞形です。自分が中心であり、主役であるものの見方です。イエスに関する限り、この語は「スプランクニソマイ(憐れむ)」の動詞形で用いられ、「関わり」であり「行動」なのです。世の現実(貧困、格差、抑圧、差別)を客観的に見るのではなく、即「関わり」なのです。実存が連帯なのです。「兄弟」は
- ④ 私のわき役ではなく、「わき役」を含めて、そこに「主が命を捨ててくださった」という出来事が起こっているのです。イエスは徹底して状況を生きられたということです。ヨハネだってそのこと知っていたでしょう。でも、ヨハネはそこから語らねばならなかったのでしょうか。自分のことしか考えない「わがまま」に神は「足下にいましたもう」と精一杯自覚を促しているのです。